



北方民族博物館だより

No.115



HR1.1 彫刻〈ビーバーマン〉

アサバスカン・インディアン／ノーザン・トゥショーニ

カナダ／ユーコン準州／ペリー・クロッシング（収集／製作）

60.0 x 29.0 x 4.0cm Eugene Alfred氏製作 2019年

カナダのユーコン準州やアラスカのアサバスカン・インディアンの人びとの間には、世界を旅しながら、人間を捕食する巨大な動物たちを退治し、人間の住みやすい世界に変えたという英雄の神話が伝わっている。ユーコン準州の人びとはその英雄を「ビーバーマン」と呼び、ビーバーであり人間でもあるものとして語る。本資料は、ノーザン・トゥショーニの彫刻家である作者に当館が制作を依頼した作品であり、彼が主導する「ノーザン・トゥショーニ様式」で作られた彫刻として世界で初めて博物館に収蔵されることになったものである。

目次 Contents

- 1 彫刻〈ビーバーマン〉
- 2-4 第34回北方民族文化シンポジウム網走
「環北太平洋地域の伝統と文化 4 アラスカ・ユーコン地域」
- 5 講座「サミと言語文化復興への取組み」
／講演会「サミの文化と工芸」
- 6 ロビー展「南隆雄 コレクション・サーベイ —北海道立北方民族博物館」
／解説会「アーティスト・トーク」
- 7 講習会「アイヌの伝統楽器ムックリ」
／講習会「ハンガリー刺繍のブローチ」
- 8 INFORMATION



第34回北方民族文化シンポジウム網走

環北太平洋地域の伝統と文化 4 アラスカ・ユーコン地域

2019.10.5-10.6

第34回北方民族文化シンポジウムでは、環北太平洋地域を対象としたシリーズの第4回目として、アラスカ、ユーコン地域を取り上げました。以下に各発表の概要を報告します。

【第1部】北アメリカ北部の先住民文化とアート (座長：津曲敏郎／当館館長)

「北米アラスカ・北西海岸研究からみた環北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究の展望」 (岸上伸啓氏／人間文化研究機構・国立民族学博物館)

新旧両大陸の北太平洋沿岸地域における先住民文化の類似性に関し、欧米では旧大陸から新大陸への人間集団の移動時期・経路、両大陸の先住民文化の歴史的関係の解明が研究課題とされてきた。それに対し、19世紀末～20世紀初頭にジェサップ北太平洋調査プロジェクト、1980年代から大陸の交差路プロジェクト、1990年代からはジェサップIIプロジェクトが実施された。一方、日本では1980年代半ばに北方民族文化シンポジウムが始まり、1980年代後半に渡辺仁の北太平洋文化圏研究、宮岡伯人の先住民言語プロジェクト、2001年に国立民族学博物館の「ラッコとガラス玉」展示プロジェクトが実施された。本報告では、これらの研究史を検討し、北米アラスカ・北西海岸研究からみた先住民社会の環境、歴史的变化、文化要素・社会制度に関する超学際的な比較研究プロジェクトを提案した。



岸上伸啓氏

「ユーコン・ファースト・ネーションズと同地域のアート史」 (U.ヴァン・カンペン氏／アーティスト、トゥショニー・オオカミ氏族・独立研究者)

本発表では、約11,500年前から現在までのユーコン地域におけるアサバスカン・アートの概要を紹介する。ここでは11,500年前～1898年の幾何学様式時代、1840～1942年のビーズ時代、1898年以降の現代という3つの時期に区分する。ユーコン・ファースト・ネーションズは独自の美術様式を持たなかったとされてきたが、アラスカ東部、ユーコン準州の大部分、北西準州西部、ブリティッシュ・コロンビア州北部にはアサバスカンのアート様式が分布している。乾燥した寒冷な気候のため、ユーコン地域は動植物相に乏しく、それらがアート作品として描かれる機会も少なかったのであろう。ヨーロッパ系アメリカ人は、アサバスカンを学術的な興味の対象としてこなかった。そのため、ファースト・ネーションズのアート文化の多くが失われ、現在もそうした文化に対する関心は高まっていない。



U. ヴァン・カンペン氏

【第2部】北アメリカの先史文化 (座長：岸上伸啓氏／人間文化研究機構・国立民族学博物館、 コメンテーター：岡田淳子氏／当館前館長)

「北東アジアおよび新大陸における人類居住の道筋：古代遺伝子と考古学研究成果から」 (ベン・ポッター氏／聊城大学北極研究センター)

北東アジアと新大陸における人類居住の道筋に関し、遺伝子研究とベーリンジアとその近隣地域における考古学研究成果は統合されていない。遺伝子研究では、ネイティブ・アメリカンの祖先は24,000年前頃に出現し、15,300年前以降に急速に拡散したとされるが、それらが生じた場所については不明である。一方、考古学研究では、南シベリア、モンゴル、中国北部のどこかでネイティブ・アメリカンの祖先が出現し、これらの地域でベーリンジア潜伏期が起こったことが示唆される。ベーリンジアにおける考古学・古環境学的記録によれば、16,000～14,000年前の退水期に内陸ルートまたは沿岸ルート（またはその両方）を通

じて新大陸への移住がおこなわれたことが示唆される。狩猟採集民の適応戦略に沿って、初期の集団移動に関する多様なシナリオの解明が進んでいる。



ベン・ポッター氏

【北海道とアラスカの細石刃石器群—その類似と差異】
(平澤悠氏／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

ベーリンジアの細石刃石器群は、新旧大陸間に共通する唯一の石器群であり、その技術的な連続性が議論されてきた。またこれらは、最初期北米移住集団の起源と拡散経路を検証する重要な証拠の一つとされてきた。アラスカにおける研究は、主に西ベーリンジアの資料を比較対象としてきた。しかし、最隣接地域の遺跡数が限られているため、おもにシベリア出土資料との比較研究が議論を主導している。一方、北海道では最終氷期最寒冷期から更新世末にかけて多様な細石刃製作技術の存在が知られているものの、アラスカ出土資料との比較研究は少ない。本報告では、北海道とアラスカ細石刃石器群を比較し、それぞれの石器群の一部は類似しているが、彫器製作技術と石材パターンは異なることを示した。両地域の考古資料の比較により、大陸間移住研究を進展させることができると考えられる。



平澤悠氏

【第3部】アラスカの先住民文化

(座長：スチュアート ヘンリ氏／放送大学、コメンテーター：大村敬一氏／放送大学)

「アラスカ先住民による環境管理」

(近藤社秋氏／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

アラスカ州クスコクイム川流域では、2010年代にマスノスケの記録的な不漁を経験した。先住民や当局の対策により、遡上数は回復しつつあるが、現在現地では金鉱山の開発という新たな問題が生じている。クスコクイム川中流域で大規模な金鉱山の開発計画が認可手続きに入ったのである。金鉱山には、稼働予定の30年間にわたって地元の先住民社会に雇用をもたらす可能性がある一方、広範囲に及ぶ環境汚染を引き起こす危険性がある。流域先住民社会は、資源採掘が狩猟や漁労に及ぼすリスクを軽減しつつ、その利益を最大化する方向を同時に模索しているように思われる。本報告では、流域の環境管理における新たな課題としての金鉱山開発と流域先住民社会の対応を紹介する。また、地下資源に依存しない地域経済振興策として、エコツーリズムの可能性を示唆する。



近藤社秋氏

「アラスカ先住民の現代美術を読み解く：グローバル化した世界のストーリーテリング」

(是恒さくら氏／東北大学東北アジア研究センター)

現代美術家として活躍するアラスカ先住民は、伝統的な技法である木彫やビーズ細工から写真、ビデオ、パフォーマンス、インスタレーションなど、多彩な方法で作品を制作・発表している。表現技法や形態は多様化しているが、根源的なテーマとして、自らの所属するグループや家系、アメリカ先住民全体の歴史、社会的問題が扱われる場合が多い。こうした作品の制作にあたっては、自身のルーツや歴史、社会的課題に関する探求が基になっている。近年、現代美術と人類学との関わりの深さが指摘されるが、彼らの作品には、人類学で扱われてきたテーマを内部の視点から捉え直すものも含まれる。本報告では、アラスカ先住民の代表的な現代美術家の表現を検討するとともに、人類学的手法を取り入れた表現者の視点で制作した自身の作品『ありふれたくじら』を紹介した。



是恒さくら氏

【第4部】ユーコンの先住民文化
(座長：井上敏昭氏／城西国際大学)

「ユーコン準州先住民によるサケ資源管理の制度的背景」
(野口泰弥／当館学芸員)

2019年、日本でアイヌに関する新法が施行され、法律上アイヌが初めて「先住民族」と認められた。しかしこの新法の課題として、アイヌの先住権について明記されていないことが挙げられる。一方、カナダ・ユーコン準州では、先住民による土地請求運動により、1990年にカナダ政府との間で包括最終協定が締結された。これにより、先住民の生業漁業について一定の権利が認められるとともに、さらにサケを含む野生生物の管理政策策定に先住民が参加する枠組みが整備された。本報告では、ユーコン先住民の土地請求運動の歴史を概観し、先住民がどのように資源管理プロセスに参加し、サケ漁獲の権利と資源保全の両立を目指しているかを示した。ユーコンの事例は、アイヌのサケ資源利用制度を考える際のモデルになり得ると考えられる。



野口泰弥

「内陸トリングットと描かれた動物」
(山口未花子氏／北海道大学大学院文学研究院)

1780年代に始まったユーロカナディアンの中米北西部への進出に際し、当時沿岸部に暮らしていた北西海岸諸民族は、内陸部の先住民とヨーロッパ系の人びととの毛皮交易の仲介役を担うようになる。その過程でトリングットの一

部が内陸部に進出し、そこに暮らしていたアサパスカン系の人びととの交わりを深めて「内陸トリングット」と呼ばれるようになった。そこでは、内陸の自然環境のなかで生活する技術をアサパスカン系の人びとに学びながら、トリングット由来の社会制度は維持するなど混成的な文化が作り出されてきた。また、彼らの文化のなかでアートが重要な役割を果たしてきたということが明らかになりつつある。本報告では、日本ではあまり知られていない内陸トリングットの文化について、アートと生業のどちらの側面においても重要な存在である動物に焦点を当てて紹介した。



山口未花子氏

今回のシンポジウムには、これまでと比較して多くの一般参加者にお越しいただくことができました。それにより、発表者やコメンテーターだけでなく、一般参加者も含めて熱心な質疑がおこなわれました。

また、9月24日には、関連事業として、RAUMA（あらひろこ [カンテレ] / 嵯峨 治彦 [馬頭琴・喉歌]）による北方民族音楽コンサート「森と草原の響き ～カンテレ&馬頭琴コンサート」がおこなわれました。どちらも弦楽器ですが、カンテレはフィンランド、馬頭琴はモンゴルの民族楽器です。網走市民をはじめとする多くの方々に来場いただき、他ではあまりみられない組み合わせを楽しんでいただくことができました。



報告者を囲んで記念撮影

(学芸グループ・中田 篤)

講座

サミと言語文化復興への取り組み

2019.9.15 10:00-11:30

講師：田辺陽子氏（ロンドン大学教育研究所）

ノルウェーに暮らすサミの言語政策について、先住民教育について研究をされている田辺陽子氏に紹介いただきました。

サミ語には現在9つの方言があり、ノルウェーではこのうち北サミ語（約1万人）、ルレ・サミ語（約2000人）、南サミ語（500人以下）が主に話されています。サミ語はユネスコの危機言語リストにあがっており、言語復興は大きな課題であり、ノルウェーでは様々な取り組みがされています。

ノルウェーにおけるサミの言語や文化復興への動きは、1970年代のアルタダム紛争とよばれる、水力発電開発への反対運動が契機となっています。ダム建設を中止することはできませんでしたが、1987年にはサミ法が成立、1988年にはサミ固有の言語、文化、生活様式を維持・発展できるように諸条件を整える旨、憲法を改正し、1989年にはサミ大学が設立されました。ノルウェーでは1990年にILO169条（原住民及び種族民に関する条約）の批准もおこなわれています。

幼稚園、小中学校、高校、大学と、それぞれの段階でサミ語教育を受ける権利が保障されています。ただし地域によっては、サミ語教師の数が十分ではないこともあります。



田辺陽子氏

田辺氏は、カウトケイノのサミ大学で、北サミ語初心者実践コースを受講されました。このコースには、トナカイ飼育の実際や靴につめるスゲ刈りなど、体験型の活動もカリキュラムに組み込まれていたそうです。

サミ語話者は就職時に優先的に採用されるなどのメリットもできていることから、子ども世代だけではなく、ノルウェー語で育った世代のサミのなかにもサミ語を学ぶ人たちが増えてきているそうです。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

講演会

サミの文化と工芸

2019.9.21 13:30-15:00

講師：エリカ・ノルドヴァル＝ファルク氏
(サミ民族学者)

スウェーデン・ヨックモック市に在住のエリカ・ノルドヴァル＝ファルク氏をお招きし、手袋を中心にサミの文化と工芸について講演いただきました。

ファルク氏は10代の頃からサミの手袋に関心をもち、コレクションを行い、ご自分でも手袋を編みながら研究をすすめてきました。ファルク氏以前に、本格的にサミの手袋について研究をおこなった人はいなかったそうです。その理由のひとつに、サミの毛糸で編んだ手袋は、比較的新しいと思われていることがあるようです。ヨーロッパからの文化は海路をとおつてもたらされました。そのなかに毛糸や、編み物の技術がありました。



エリカ・ノルドヴァル＝ファルク氏(右)と通訳者

サミの衣装に地域差があるのと同じように、手袋にも地域性があります。例えばヨックモックでは「コーヒー豆」と呼ばれる模様の手袋が特徴であるなど、手袋は柄のバリエーションが豊富です。形もまるかったり、とがっていたり、綴じ方の違いがあったりします。

用途によっても手袋は異なっています、作業用のものだとしっかりと編み、1、2シーズンで取り替えます。湿気がこもらないように、手首の部分が肌に密着しないように編まれています。祝日用のものは、飾りをつけ、生涯使えるよう大事に扱うそうです。

現在ファルク氏のコレクションは、巡回展になって各地で紹介されています。

手袋のほかに、コルトとよばれるサミの衣服のことや、サミの日常生活についても紹介されました。一緒に来日された夫のオーブ氏も、会場からのトナカイ皮のなめし方についての質問に、皮を剥ぐところから詳細に説明して下さいました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

ロビー展

南隆雄 コレクション・サーベイ
—北海道立北方民族博物館

2019.10.26-11.10

本展では、さっぽろ天神山アートスタジオ2018年冬季招^{しょう}聘レジデンスプログラムにより、アーティストの南隆雄氏が当館収蔵の民族資料を題材に制作したビデオインスタレーション作品を展示しました。この作品は、当館収蔵の民族資料100点とそれらを撮影・編集して作成した映像、上下左右にレンズを動かすことのできる4台の監視カメラ、そして展示室の外に見える周辺の自然景観から構成されています。

まず映像については、南氏が昨年12月～今年2月にかけて網走に滞在し、当館でウデへの衣服やウイльтаのお守り、イヌイトの彫刻など、さまざまな地域や民族の資料をビデオカメラで撮影したものを素材としています。実際には約200点の資料が撮影されましたが、それらのなかから100点分を抽出し、さまざまな加工を加え、組み合わせて映像が作成されました。映像の長さは約8分間で、55インチの大型モニター4枚を組み合わせた巨大な画面で上映されました。

画面のすぐ前には4台の監視カメラが設置されました。個別に上下左右に向きを変えるレンズの動きとモーター音、そしてモニターに映し出される民族資料の動きが連動するように制御されています。

そして、画面の背後のスペースには展示ケースと展示用のステージが弧を描くように設置され、映像制作に使用された実物の民族資料100点が、ほぼ映像に登場する順に配置されました。

この作品では、映像と実物の資料、監視カメラの動きが連動し、時間と空間を超えたイメージをうみだすことで、北方文化圏における視覚要素の変容を「グラデーション」として描くことを試んでいます。そしてそれらが周囲の自然景観と呼応し、一つの作品になっています。本展により、民族資料の新たな見方、感じ方を体感していただくことができたとと思います。



当館展示資料と連動したビデオインスタレーション作品

(学芸グループ 中田 篤)

解説会

アーティスト・トーク

2019.10.27 13:30-15:00

講師：南隆雄氏（アーティスト）

ロビー展の関連事業として、アーティストの南隆雄氏による解説会を開催しました。

はじめに、南氏が作品のテーマである「圏」を表現するうえで、北方民族博物館（以下当館）が北方圏を対象としていることに共通性を感じ、博物館所蔵資料での作品づくりを考えたという経緯について話されました。次に作品づくりのための素材撮影の過程と、作品のストーリーの下敷きとした北方民族の民話について紹介されました。また、今回の展示につながるこれまでの作品の解説をされました。作品の一部になっている監視カメラも博物館を連想させ、博物館収蔵品であることや、博物館という場を強調する効果を期待しているそうです。



南 隆雄氏

次にゲストスピーカーの天野太郎氏（札幌国際芸術祭2020統括ディレクター）が、南氏の作品が博物館の収蔵品を対象としたことから、近年の博物館・美術館の収蔵庫の役割の変化を監視カメラによるパノプティコン（全展望監視システム）につなげてお話しされました。この監視には、例えば博物館では静かにするというような事柄が含まれることにも触れていました。

もう一人のゲストスピーカーである四方幸子氏（多摩美術大・東京造形大客員教授）が、監視が一方で見守りとなっている側面や、(民族学)博物館の歴史についての考えを述べられました。また圏を取り巻くグラデーションが南氏の作品から読み取れることを指摘されました。

さっぽろ天神山アートスタジオの小田井真美氏は、南氏の作品づくりが札幌市のアーティストインレジデンス事業の成果であることを紹介されました。当館の笹倉は、南氏への関わりについて、作品づくりに協力したということではなく、当館の博物館特別利用の範囲という、博物館としての立場について説明しました。

作品を直接解説するものとは異なる解説会になりましたが、複数の視点から語ることによって、参加者には作品により関心をもっていただけたようです。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

講習会

アイヌの伝統楽器ムックリ

2019.11.9 13:30-15:00

講師：郷右近富貴子氏（アイヌ文化伝承者）

郷右近富貴子氏を講師に、アイヌの伝統的な口琴「ムックリ」の講習会を開催しました。郷右近氏は、幼いころからアイヌ舞踊などを習いながら成長し、現在は阿寒湖を遊覧する観光船でムックリやトンコリ（五弦琴）などを演奏しながらアイヌ文化を紹介しています。また、姉である床絵美氏と「Kapiw & Apappo」というユニットで音楽活動もおこなっています。

講習会では、最初に講師のムックリ演奏を聴き、それから講師とムックリの出会いやムックリ演奏の面白さ、奥深さ、ムックリの構造やさまざまな音色が出る仕組みを紹介していただきました。ムックリは、音を出す弁と枠の部分から成る簡単な構造の楽器です。枠に付けられた紐を引き、弁を振動させて音を出し、その音を演奏者が口のなかで共鳴させたり、口の形や舌の位置などを変えたりして変化させます。また、講師が世界各地の口琴大会に参加した際に集めたさまざまな口琴を見せていただいたり、それぞれの演奏を披露していただきました。



郷右近富貴子氏

その後、実際にムックリの演奏法を教えてくださいました。最初に片手でムックリの端をしっかりと持ち、もう一方の手で紐をリズムカルに引っ張って弁を振動させます。ここで音が出るようになってから、ムックリを口元に近づけ、口の中で音を反響させます。ムックリの音を出しながら、舌の位置を変えたり、喉の奥を広げたり、息を吸ったり吐いたりしてさまざまな音色に変えていくのです。

上手に音を出せるようになるには、ひたすら紐を引っ張ってやってみるしかありません。単調な作業ですが、途中、DVDで他の演奏者の演奏を見たり、金属製の口琴の演奏を試したりしながら練習を続けます。最終的には、ほとんどの参加者がしっかり音を出せるようになり、それぞれ音色を変えて演奏を楽しみました。

(学芸グループ 中田 篤)

講習会

ハンガリー刺繍のブローチ

2019.11.10 9:30-12:30

講師：春日一枝氏（Bahar 代表）

北方民族博物館では主に北方地域の文化を紹介していますが、今回は北方との比較を目的に、ハンガリーの文化をテーマとしました。世界中の手芸文化について造詣が深く、手芸関連本の編集も多く手がけている春日一枝氏を講師に、ハンガリー刺繍のブローチを作成する講習会を開催しました。

ハンガリー刺繍はカラフルな糸を用いたもので、モチーフは花や鳥、幾何学紋様がよく知られています。このほかに白糸だけで刺繍されたものやクロスステッチのものもあります。



春日一枝氏

はじめに春日さんが、スライドを用いてハンガリー刺繍の概要について紹介されました。ハンガリー刺繍ではカロチャ刺繍とマチョー刺繍が代表になっています。どちらも地名からとられた刺繍名です。カロチャ刺繍でモチーフとモチーフの間がレース状になっているものは、現在は改良したミシンで縫われています。

今回の講習会ではカロチャ刺繍を体験しました。玉はつくらずに縫い始めます。糸端は刺繍のなかに収めてしまいます。使うステッチは、サテンステッチとアウトラインステッチの二種でした。糸はハンガリーからの輸入品で、日本の刺繍糸に比べると太く、一本取りで使います。花部分を刺繍したあとで茎と葉を刺繍します。

刺繍が終わると型にそってはさみで引き抜き、ブローチに仕立てました。集中した作業の合間には、春日さんがおもちになった参考作品を手にとってみながらの、楽しい時間となりました。



(学芸グループ 笹倉 いる美)

ロビー展 オホーツクシリーズ13「北の状景から」

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の13回目として、オホーツク地域の魅力を伝える写真作品を紹介します。

■期間：令和2年（2020年）1月4日（土）～1月19日（日）、観覧無料

■会場：北方民族博物館 特別展示室

■主催：北海道立北方民族博物館

■主な展示資料：オホーツク地域の自然や文化、人びとの活動を撮影した写真（計20～30点）

企画展「北のファーストネーションズ～北米北西海岸の人びと」

アラスカ南東部からカナダ南部までの太平洋沿岸は北西海岸と呼ばれています。この地域は豊かな海洋資源や森林資源を背景に、トーテムポールなどの木彫やポトラッチなどの儀礼など、特徴的な先住民族の文化が育まれた地域として知られています。本企画展では特に、北西海岸北部の諸民族（トリンギット、ツィムシアン、ハイダ）を取り上げ、生業具、食器、楽器、衣服、彫刻、版画などの当館コレクションから北西海岸の人びとの伝統的な生活を紹介します。

■会期 令和2年（2020年）2月1日（土）～4月5日（日）（月曜休館。ただし2月は無休開館）

■会場：北海道立北方民族博物館 特別展示室 観覧無料

■主催：北海道立北方民族博物館

◇関連事業：

■企画展展示解説会

2月2日（日）10:00-10:30 講師 野口泰弥（当館学芸員）

■講習会「チルクット織り」

3月7日（土）9:30-16:30 講師 是恒さくら（美術家）

■講座「トリンギットの文化と環境」

3月8日（日）10:00-11:30 講師 飯塚宜子（京都大学研究員）

■はくぶつかんクラブ「北方民族の太鼓をつくろう」

3月14日（土）10:00-12:00 講師 宮本花恵（当館学芸員）

■講座「日本とアラスカ先住民の歴史」

3月22日（日）13:00-15:00 講師 野口泰弥（当館学芸員）



チルクットローブ／トリンギット

INFORMATION

行事報告

◆8月10日（土）はくぶつかんクラブ「スタンドグラス風木箱作り」（講師：平栗美紅解説員）を開催しました。

◆8月17日（土）上映会「北方民族博物館シアター 夏」（講師：笹倉いる美学芸員）を実施しました。

◆8月31日（土）はくぶつかんクラブ「北欧風パンケーキとジャム&バターづくり」（講師：菅原章子解説員）を開催しました。

◆9月7日（土）上映会「北方民族博物館シアター 秋」（講師：野口泰弥学芸員）を実施しました。

◆9月22日（日）講習会「サミの手袋」（講師：エリカ・ノルドヴァルフアルク氏）を開催しました。

◆9月28日（土）はくぶつかんクラブ「インディアンのテント・ティピ型ライトづくり」（講師：平栗美紅解説員）を開催しました。

◆10月19日（土）はくぶつかんクラブ「フェルトでつくるシロクマのコインケース」（講師：石原生久代解説員）を開催しました。

◆10月20日（日）講習会「お細工物押し絵のおひなさま」（講師：浜田智津子氏）を開催しました。



押し絵を指導する浜田智津子氏

◆11月1日（金）～11月7日（木）ロビー展「地域の文化遺産紹介パネル展『北海道の古代集落遺跡』」を北海道文化遺産活用活性化実行委員会との共催で開催しました。

◆11月3日（日・祝）第11回はくぶつかんまつりを開催しました。ボルシチの販売や家畜のくるぶしの骨を使ったシャガイ占い、モルック大会の開催、マシュマロ焼き体験やクイズなどを実施しました。



モンゴルの暮らしをのぞいてみたよ！

移動展示報告

◆10月12日（土）～11月17日（日）北海道大学総合博物館企画展「融ける大地－温暖化するシベリア・中央ヤクーチア」を北海道大学総合博物館企画展示室にて開催しました。

◆11月9日（土）～12月1日（日）「アイヌの民族衣装展～北海道立北方民族博物館所蔵資料展～」を北圏北見文化センター美術展示室にて開催しました。

職員の異動

[採用]令和元年（2019年）11月16日
宮本花恵（学芸員）

お詫びと訂正

◆前号4ページの講座「はじめてのアイヌ語」の開催日時に誤りがありました。謹んでお詫び申し上げます。
(誤) 2019.5.19 → (正) 2019.8.3

北方民族博物館だより

No.115

令和元年(2019年) 12月20日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org

<http://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会